Japanese Association for Religious Studies

関川泰寛著

『アタナシオス神学の研究』

教文館　二〇〇六年一月二八日刊
A5判　五七九頁＋一五頁　七五〇〇円＋税

水垣　渉

わが国における教父研究は、アウグスティヌス研究の進展を例外として、散発的な研究と翻訳の段階をようやく脱して、研究分野として一定の地歩を獲得しつつあるように思われる。近年、邦人研究者による教父関係の著作の刊行が続いているのは、そのことのあらわれであり、東方におけるもっとも重要な教父の一人である四世紀のアタナシオスについての総合的な研究である本書は、そのことを確実に裏書したものといえよう。

著者は一九五四年生まれ、現在東京神学大学教授である。

三世紀末にアレキサンドリアに生まれ、三七三年に没したアタナシオスは、その八十年近い生涯において、ディオクレティアヌス帝の大迫害、コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認とその後三百八十年のテオドシウス帝によるキリスト教の国教化直前にいたる教会の大混乱といったキリスト教史においても稀な大変革期を経験した。かれの著作の多くは、五度追放の憂き目にあったことにもあらわれているかれの司教としての教会政治とのかかわりからものされた（真正な著作でないものを含めてミーニュ教父著作集で四巻、*PG* 25-28）。主著と目される『アレイオス派駁論』も、そのような性格の著作である。アタナシオスの神学思想をかれの全体像の中に位置づけて把握しその特質を理解することは、著作の信憑性を含めて歴史的にも思想的にも極度の困難を伴うことになる。このため、本著のようなアタナシオスの総合的研究は、これまで諸外国においても少なかった。この意味で、本書はアタナシオス研究史上注目すべき著作である。

本書は六百頁近い大著であって（この点でもわが国で公刊された教父研究書中最右翼のもの）、その多面的な構成と内容を簡単に要約することはできない。著者の入念な構想を知るためにも、目次の全体を紹介しておく必要がある。

はじめに
略号
地図
第一章　研究史概説
第二章　アタナシオスの時代
　第一節　都市アレキサンドリアとその社会
　第二節　アレキサンドリアの諸共同体
　　――ユダヤ人、異教徒、キリスト教徒
　第三節　アレキサンドリアにおけるキリスト教徒
　第四節　アタナシオスの著作と生涯
　　――史的アタナシオスの探求
　第五節　アタナシオスにおける政治と神学

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

第三章　アタナシオス神学の特色
第一節　神論
第二節　キリスト論
第三節　聖霊論
第四節　頌栄的モチーフ
第五節　諸霊の識別
第六節　聖書理解
第七節　旧約聖書と教会
第八節　アタナシオスにおけるキリストの人間的魂
第四章　アタナシオス神学の背景と展開
第一節　禁欲倫理
第二節　福音と文化
第三節　アレイオス主義の思想的系譜とその本質
第四節　バシレイオスにおける聖霊の教理と洗礼
第五節　ナジアンゾスのグレゴリオスにおける三位一体論
第六節　礼拝における言葉の新しい可能性
——歴史の中に言葉の教脈を探る
あとがき
所収論文初出一覧
参考文献
索引

まず「あとがき」によって著者の意図と方法を紹介しておこう（以下、漢数字は本書の頁を示す）。

「アタナシオスの生涯と著作から得られた情報を、ただ四世紀という古代末期のホリゾンタル（水平）な地平に投影しただけでは、古代末期の都市エリートの典型としての「権力に飢えた司教」像というきわめて一面的な姿しか見ることができない。そのようなアタナシオス像は、アタナシオスの牧会者としての姿勢がよく現れている著作やアタナシオスの霊性が溢れ出ている文章を捨象することによってしか、アタナシオスの行為と神学の一貫性を説明できなくなってしまう。したがって、今日のアタナシオス研究にとって重要なことは、ヴァーティカル（垂直）な視線から目を離すことなく、そこからもう一度ホリゾンタルな方向を見直すことである」（五七六）。

これらの言葉に、著者が詳しく検討した従来のアタナシオス研究への批判と、著者自身の視点と方法とが明確に示されている。そして著者の課題と意図は、次のように表明されている。「アタナシオス神学の背後には、明瞭な礼拝への本能、頌栄的な特質を読み取ることができる。……この頌栄としての神学の営みと姿勢こそ、アタナシオスの教説をアレイオスの教説と決定的に区別するものであるというのが本書全体の主張である」（五七五）。すなわち、「聖書証言と三位一体的な言語が、一定の歴史状況の中で、いかにして頌栄的な特質と融合して、独自の強靭な神学的世界を構築しえたかを解明することが、本書の課題であった」（五七五—六）。著者はこれによって「彼の神学の一貫性を明らかにする」（五七五）とともに、「……アタナシオス神学全体の教理史上における積極的な評価を可能にしたのではないかと考えている」（五七六）。

以上の言葉からも窺われるように、著者は「四世紀のアレキ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

サンドリアを中心とする地中海世界の嵐のような時代状況」（三）から目を離すことなく、「牧会者、聖書釈義家、教会人としての側面にも光をあてて、かれの思索と行動の一貫性を明らかにしようとする……」（四）。それゆえ、本書における著者の課題を先鋭な形で表現するならば、四世紀の時代状況と頌栄的な特質をもつ神学の成立との関係ということになろう。先にホリゾンタルとヴァーティカルといわれていたのはこのことにほかならない。これは極めて興味深い問題といわなければならない。

以下各章の内容を紹介しつつ、注目すべき諸点をわたしなりに取り上げることにするが、それに先立ってアタナシオスのテクストについて言及しておきたい。本書では本文の前に、アタナシオスの著作リストが略号とともに掲載され、そして巻末の参考文献表の一次史料の項に、それらのいくつかの校訂本と翻訳とがあげられている。しかし、現在でもアタナシオスのテクストとしてはミーニュ教父著作集によらざるをえないところが多く、実際著者もこれを用いて、本文と注においてその旨記しているのであるから、一次史料のリストにはミーニュをまずあげるべきであったろう。また、プロイセン学士院の教父委員会によってすでに一九三〇年代半ばから出版され始めていた『アタナシオス著作集』（*Athanasius Werke*）があげられているものの、それを戦後引き継いだノルトライン-ヴェストファーレン学士院の教父研究部による校訂テクスト（そのなかには『アレイオス派駁論』のような重要な著作が含まれている。二〇〇〇年に完結）は漏れている。ミーニュ版と『著作集』版とでは読み方が違うこともある。四〇〇はじめのテクスト引用中、lalein は後者では lalounta である（なおミーニュ版によっているとしても、hos は hon の、meta は kata の、kateskeuasen は kateskeuazen の誤記である）。論文執筆時には未刊行で参照不可能であった場合もあろうが、文献表には欠かせない。

第一章「研究史概説」は、史的アタナシオスとその神学についての従来の研究を振り返りつつ、一九八〇年代以降現在に至る研究の争点をまとめ、さらに今後の研究への展望を開いている。参考文献表によれば著者は二〇〇一年までの文献を参照しているから、この概説は短い叙述とはいえ、著者が最近までのアタナシオス研究史に通暁していることをよく示しており、わたしを含めてアタナシオスを専門としない教父研究者にはよい参考となる。なおハルナックの『教理史教本』への言及中（二五）、「神学」は「神論」とすべきである（同じく二二三も）。

本書の特色の一つは、第二章で、アタナシオスの活動したアレキサンドリアの歴史的・社会的状況を叙述し、さらにこの地での教会とキリスト教徒の状況を明らかにしたうえで、史的アタナシオス像を生涯と著作に即して示し、最後にアタナシオス研究上もっとも問題になるかれの教会政治とのかかわりを、修道制の問題をも含めて、百六十頁余にわたって詳細に論じていることである。アレキサンドリアの歴史と社会についての叙述は、著者自身認めているように二次史料に多く依拠しているが興味深く、とくに第三節のアレキサンドリア教会の実像と教会内での党派的抗争を描き出した部分は、価値が高い。また著者

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

が従来のアタナシオス研究の多くが前提していた政治と神学という二分法を疑問視しているのは（一七二）、アタナシオス神学の一貫性という著者の主張と方法論的に関連している。アタナシオスの略年表（一〇七―一一二）も有益である。ただし本文中ではこれとは違う年代によっている場合もある。

本章で惜しむべきは、誤記など少なくないことである。一見して分かる誤りは別にしていくつかあげるならば、三七の『アレイオス派の歴史』からの引用文は相当不正確であり（そのほか一七五―六、一七七の引用文なども）、三八の「詩人ディオドルス・シクルス」は「歴史家～」、一〇一の「カルケドン公会議の第二五法令」は「～二六法令」、一九六頁注二九の「ソトディオスのしらべ」は「ソータデース風～」に改めるべきである。またしばしば言及されるリュコポリスの「メリティオス」（Melitios）が本書では一貫して「メレティオス」と表記されているのは理解に苦しむ。

本書の中心は、二百頁余にわたる第三章「アタナシオス神学の特色」にある。著者はまず神論、キリスト論、聖霊論を論じる。教理史と哲学史の背景とともに研究史を顧慮したこの部分は、アタナシオスの神学の基本的な立場を知るうえで重要である。そのなかでもとくに注目されるのは、『セラピオンへの手紙』などのテクストとともに学説史との折衝を踏まえて論じられている聖霊論である。詳しい内容を紹介する暇がないことは遺憾であるが、著者の結論の一部だけ引用しておきたい。「アタナシオスの三一なる神についての教理的基礎は、働きにおける神の存在と存在における神の働きとを共に同時的に保持している点に存する。バルト以後の聖霊論が、聖霊の働きをnoeticな側面に限定することによって、聖霊の働きと存在に再び乖離が生じていることを覚えるなら、アタナシオスの聖霊論の特別な意義を思わしめられる」（二六三）。著者が現代神学の問題点にも通じる広い視野でアタナシオスを研究していることがよく分かる。

第四節の「頌栄的モチーフ」が著者の問題意識の核心にかかわっていることは、著者自身の言葉から明らかである。「本節は、アタナシオスの著作の教理的陳述の中に繰り返し出てくる「頌栄的モチーフ」が、背後に礼拝の本能を持ちながら、どのようにアタナシオスの神学全体と関係しているかを探求しようとするものである」（二七七）。頌栄モチーフとは、「神礼拝、神賛美、神告白といった典礼に根拠を持つと推測される人間の行為全体とかかわる、より広汎な神学的モチーフ」のことである（二七七）。著者は『異教徒駁論』、『言の受肉』、『セラピオンへの手紙』における頌栄について検討し、「アタナシオスの神学の構造の一貫性を支えるのは、背後にある頌栄的動機であるように思われる。……この継続して流れるモチーフのゆえに、アタナシオス神学の構造は、教理と礼拝の調和の中に置かれている」との結論に到達している（二八七―八）。この「教理と礼拝の調和」はおそらく教父たちと共に著者の理想でもあろう。しかし著者がこのモチーフの重要性を主張する割には、本節は比較的短く（二十頁）、さらに多くの著作の検討によって裏付けられる必要があったのではないか。著者が繰り返し述べている「礼拝の本能」という興味深い概念についても、説明

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

を聞きたいところである。

第三章には、これらのほか第五節で「諸霊の識別」、さらに二節にわたって聖書理解、そしてアタナシオス神学研究の争点の一つであるキリストの人間的魂の問題が取り上げられている。第七節で詳しく検討されている「牧会者としてのアタナシオス像を如実に示している」『詩編解釈に関するマルケリノスの手紙』からは、教えられることが多い。

本章でもテクストの訳で不十分なところがまま見られる。二一七の『アレイオス派駁論』一・一三からの引用「あなたが時間（chronon）を意味するときに、なぜ、あなたは単純に「ロゴスは存在しなかったときには、時間は存在しなかった」（En chronos hote ouk ên logos）と言わないのか……」は、「あなたがたが時間（chronous）を意味するとき、なぜ「ロゴスが存在しないときがあった」とはっきり言わないのか」であろう（chronous は *AW* の読み）。さらに三八一の引用など。また二二二注五四の「③聴き手に受け与えるという意味で見ること」は「③受け取り、聴取する、という意味で見ること」であろう。二〇七の ho ôn は「存在」でなく、『ティマイオス』の to on と区別するために「存在者」とするほうがよい。

第四章「アタナシオス神学の背景と展開」の第二節「福音と文化」で『異教徒駁論』を主要な資料として魂の問題とロゴスの礼拝が論じられていることは、注目される。なぜなら、すでに初期著作において偶像礼拝との対比においてではあるが頌栄的モチーフに連なるものが認められるからである。第三節「アレイオス主義の思想的系譜とその本質」は、研究史とアレイオスの資料の検討から始めて、主としてローレンツとハンソンにしたがってアタナシオスによるアレイオスの教えを要約している。そのさい著者が、ローレンツによるその教説の表に若干手を加えて訳しているのは、大変有益である。そしてハンソンがアレイオス主義の核心とする「苦しむ神」の教説の意義に関して、「アレイオス主義者こそ、ある意味では十字架の躓きを最も真剣に考察していた、古代教会の数少ない神学者の一人であったとも言えるであろう」と高く評価しつつ（四九八）、「しかしアレイオス主義は、アタナシオスと違って、ロゴスが人間の諸経験を引き受けることによって、救済を可能にすると考え、ロゴスを内在化させる。従って、ロゴスに対する頌栄的な認識が、アレイオス主義には見られないのである」と批判的に指摘する（四九九）。最新の研究状況の問題点に鋭く切り込んだこのあたりの叙述は、きわめて興味深い。著者はさらにバシレイオスやナジアンゾスのグレゴリオスにも筆をのばし、アタナシオス研究をより大きな視野へと広げている。教理史家としての著者の力量を示している。本書は、三位一体的な礼拝の言語すなわち頌栄的な言語の意義を現代にまで及ぼして論じる第六節で閉じられる。現代の礼拝に三位一体的な言語の衰退が見られ、礼拝の言語がアレイオス主義化することを憂いる著者は、アタナシオス研究の現代的意義を明確に語ることによって、教理史家であると共に実践的な神学者であることをも示している。これまた本書の魅力である。

本章についても、テクストの訳をすべてチェックしたわけではないが、気付いた限りでいくつかの不備を指摘しておかなけ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ればならない。四九五―六のエウドクシオス（「エウドキオス」でなく）の信仰規準の訳、五〇一注一七の訳はかなり修正が必要である。四三〇の「アナコレーシス」は「アナコーレーテース」とすべきであり、四五〇のプラトンの paradeigma の訳語「例証」は「範型」が定訳、四七八の kurtolexia は kurio-lexia の誤記、四八四の人名からはグレゴリオスが脱落している。四八三のハンソンからの引用も正確とはいえない。四七二注七九の邦訳『プラトン全集12』からの引用はおよそ忠実ではない。

本書は、アタナシオスの歴史と神学とを研究史を十分に踏まえて総合的に考察したうえで、その頌栄的モチーフに独自の意義を見出そうとする意欲的な研究である。このテーマは、一方では信仰者、とりわけアタナシオスのように教会の指導者として神学的な課題を背負っている信仰者が生きている現実の激動する政治的・社会的状況と、他方では信仰者が信仰の目標とする神の栄光賛美という礼拝的・頌栄的な生活との緊張関係、普遍化していえば、信仰者の歴史的生と宗教的生との関係という根本問題に連なっている。本書はこの点について多くの示唆を与えるものであるが、著者の主要テーゼが十分根拠づけられるためには、今あげた緊張関係についてのより明確な方法論的具体化が必要であり、それには典礼史的な視点からの研究も不可欠ではないかと思われる。

本書は学術的研究としては不備な点も少なくないとはいえ、今後本邦におけるアタナシオス研究の標準的著作の地位を占めることになろう。著者に今後の研究の発展を期待したい。

深井智朗著『超越と認識――二〇世紀神学史における神認識の問題――』

創文社　二〇〇四年八月三〇日刊
A5判　vii＋三五五＋五頁　六六〇〇円＋税

佐藤啓介

神学が神についての言述をつむぐ営みであるとして、絶対的な神について有限な人間が有限な言語をもってそれを営むことがそもそも可能なのか。こうした問いは、古くから神学の中で幾度となく繰り返されてきた問いである。だが、この問いは、近代以降進んだ宗教の私事化の果てに、「神なしに生きかつ考えることがあらゆる人間の日常生活を規定しているだけではなくキリスト教信者の日常さえをも規定している」（パネンベルク）現代に提起された場合、その深刻さは絶望的なまでに深くなる。本書において著者の深井氏が取り組んだのも、まさにその問いである。本書は二〇〇四年度中村元賞を受賞し、多方面で話題となったものであり、今、本書を取り上げるのは遅いくらいだと言えるかもしれない。事実、すでに本書に対しては、森本あんり氏（『日本の神学』四四号、二〇〇五年）や月本昭男氏（『創文』七月号、二〇〇五年）らが書評を記している。

著者は、バルトが『ローマ書注解』の初版を出版した一九一九年から、モルトマンが『体系』を完成させた一九九九年を

NII-Electronic Library Service